

『わたしが ちいさかったときに』

院長 長山 直弘



八月になるとよく思い出すことがあります。

私が大学三年生（十九歳）時の、夏休みに入った直後の七月末か八月初めのことでした。或る日校内を歩いていて、急に思いついて大学生協の書籍部へ行きました。書籍部という所は学生や教職員に必要な本（つまり教科書・参考書・専門書など）しか販売してなくて、たとえば漫画や週刊誌などの一般的なものは置いていませんでした。ところがレジの近くにある本がうず高く積まれていました。

あっ、こんなところに絵本がある！

驚いた私は思わず手に取りました。パラパラとめくった私は買って読んでみる気になりました。当時の値段は覚えていません。現在は千四百円（童心社）です。

大学時代私はいつも大学の総合図書館で勉強していました。安下宿は狭くて（三畳）暗くて（一日じゅう日が入らない）勉強には向いていなかったのです（家賃も安く三千円/月）。それでその本を図書館に持って行って勉強の合間に読み始めましたが、次第に自分の気持ちと様子がおかしくなってきました。これはいけない、と思った私は急いで下宿に走るようにして帰りました。そこで周囲に気兼ねなく読み続けたのです。そこには単純・透明・純粹に死の悲しみが描かれていました。そして私は肚の奥からどっと溢れてくる涙をいつまでも流し続けたのです。

それが表題に掲げたタイトルの本でした。幼い日に広島で原爆を体験した子供たちが約五年後に学校で当時のことを作文に書くように言われて提出したものを編集して作られた本から更に抜粋して絵本にしたものでした。

自分たちの体験を淡々と語っているだけなのですが、原爆を恨むでもなく、敵国を恨むでもなく、自分の運命を恨むでもなく、ただ真っ直ぐに純粹に何かに向かって生きているその姿が、激しく私の心を揺さぶりました。原爆はいけない、絶対にいけない、再び原爆を使用すると人類は人類ではない、不気味な存在になってしまう、ということ私に心の底から思わせたのです。

その夏休みに私は帰省の途中に広島へ寄りました。文中に出てきた地名や作文の作者の消息を訪ねてあちこち歩き廻りました。その中である作者はナースになって医師と結婚し今は幸せに暮らしている、ということなどを知りました。